

## 散逸した〈しのびね型〉物語：『風葉和歌集』所収 散逸物語における〈しのびね型〉物語の可能性

宮崎，裕子  
九州大学：専門研究員

<https://doi.org/10.15017/25247>

---

出版情報：語文研究. 110, pp.20-40, 2010-12-26. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 散逸した〈しのびね型〉物語

——『風葉和歌集』所収散逸物語における〈しのびね型〉物語の可能性——

宮 崎 裕 子

一

文永八年（一二二一年）に、後嵯峨院の後大宮院媞子の命によつて編纂された『風葉和歌集』は、平安〜鎌倉初期に成立した二百余編の物語から和歌を収録している。その中で、断片的にでも現存するのは二十数編のみであり、大多数の物語は散逸してしまつた。

こうした散逸物語には、現存する物語と類似の構想を持つと推測されるものがあり、それらを復原する際には、現存物語に描かれた物語展開や人間関係の様相が一つの指標となり得る。

勿論、現存物語の構想に添わせる形での復原作業には、と

もすれば指標となる現存物語の枠組みに縛られた先入観を持つことで、散逸物語を本来の姿から遠ざけてしまうという弊害を伴う恐れもある。しかしながら、類似の構想を持つ複数の物語を比較対照することは、作品成立当時の物語享受の在り方を知る上でも有用であり、それを現存物語のみならず、散逸した物語群をも視野に入れて行うことにより、広範にわたる検証が可能となる。

そこで本稿では、『風葉和歌集』の中から、王朝物語に頻出する〈しのびね型〉の物語と推定される散逸物語を抽出し、〈しのびね型〉の物語展開を主軸とした復原を試みた。

相思相愛の男女の仲が何らかの事情で破綻をきたした後、

行方をくらませた女君は後宮に入つて帝寵を受ける身となり、それを知つた男君は彼女が手の届かない存在となつたことを嘆く、という『しのびね型』の物語展開は広く愛好されたようである。中世王朝物語にも、『しのびね型』を主題とする『むぐら』(前半部欠)、『あきぎり』がある。また、主題にはせずとも、『しのびね型』の要素——男女の仲が途絶えた後に女君が帝の寵愛を得て后妃の地位に昇る——を含む『いはでしのぶ』『石清水物語』、古本からの改作過程において『しのびね型』の要素を取り入れた『今とりかへばや』など、複数の物語にその影響が見える。更に、現存する物語のみならず、散逸物語にも『しのびね型』が多く含まれていたことは、すでに神野藤昭夫氏が指摘された通りである(『散逸した物語世界と物語史』、若草書房、一九九八年)。

一一六六年頃の成立とされる『源氏一品経』に、

有本朝物語之事、是古今所製也、所謂落窪・石屋・寢寛・忍泣・狭衣・扇流・住吉・水・浜松・末葉・露・天ノ葉衣・

格夜姫・光源氏等也

(『国語国文学研究史大成3 源氏物語 上』、『三省堂』、一九六〇年) 37頁)

とあることから、『しのびね』は平安末期の成立と推定されるが、残念なことにこの『しのびね』自体は他の多くの物語と同様に散逸している。南北朝頃の成立とされる改作本(注)が現存してはいるが、古本『しのびね』そのものの資料は、『風葉和歌集』に収録された次の三首の和歌のみである。(注)

巻第四秋上220

内侍のかみつれなきさまに見えたてまつりければ、

七日のたまはせける 忍び音の帝の御歌

今日さへやただに暮らさん七夕の逢ふ夜は雲のよそに聞  
きつつ

巻第十八雑三1371

せちに思ひける女に、心にもあらず隔たりにければ、

世を背かんとて、いささか立ち寄りて

忍び音の中將

行末を何契りけん思ひ入る山路に雲のかかりける世を  
巻第十八雑三1372

本意遂げて後、同じ人のもとにさし置かせける

あはれとも思ひ起こせよ白雲の柵引く山に跡絶えぬとも

これだけでは、「中将」と「内侍のかみ」との関係は明らかではないが、改作本によって、「せちに思ひける女」が「内侍のかみ」と同一人物であることが判明している。

登場人物名を物語における最終的な身分で示す『風葉和歌集』において「内侍のかみ」と呼ばれる女主人公が、現存本では国母として「女院」号を得ており、改作する際に女君が栄華を極める物語として加筆されたと考えられる。また、古本から『風葉和歌集』に入集した前掲の和歌は、改作本には一首も取り入れられておらず、どの程度まで古本の面影を留めているのかは不詳であるが、しのびね型 物語の構想の指標となる現存『しのびね』の梗概は次のようなものである。

中将（改作本における最終官職は「中納言」）は嵯峨野で故中務卿宮の姫君を見初め、姫君とその母尼を京に迎え取る。二人の間には若君が誕生するが、中将の父である内大臣は、若君を手元に引き取り、中将を左大将の娘と結婚させて、姫君母子を追い出してしまふ。母とともに、縁者である内侍の局へ身を寄せた姫君は、内侍から自分の後任として出仕することを勧められ、帝

からも執拗に搔き口説かれるが、頑として靡こうとしない。

姫君の失踪に悲嘆に暮れていた中将は、帝が執心している女性が姫君その人であったことを知る。宮中で密かに姫君と対面した中将は、若君の将来の為に帝に仕えるように、と姫君に言い残して姿を隠し、出家する。

やがて、姫君は内侍として出仕し、中将を慕って泣き暮らしていた彼女を帝は「忍び音の内侍」と呼ぶ。帝の寵愛を受けた姫君は、第一皇子を出産して女御となり、その皇子の立坊・即位に伴い、中宮・女院となった。

現存『しのびね』がこのような内容を持つことから、市古貞次氏は、

「忍音物語」は一言を以てこれをつくせば、悲恋遁世談である。

（『中世小説の研究』東京大学出版会、一九五五年）と指摘し、類似の内容を持つ「忍音物語」系諸作品は大体次のような構想により成ると整理された（前掲書。尚、引用に際して旧漢字を現行の字体に改めた）。

一、容貌秀麗、才芸兼備の主人公が、ふとした事から、素性はいやしくないが今はわびしく暮す美貌の女性を見そめ、これと深く契り<sup>注</sup>を結ぶ。

二、二人の間には子供が生れ、しばらくは幸福な結婚生活が続けられるけれども、やがて男の父の政略的結婚の強要など、思ひがけぬ障害のために、相思の仲は破綻を来し、女は庄迫を受けて、失踪する。

三、主人公は恋人の行方を追ひ求め、悲歎・苦悶を続けるが、

四、遂に再び恋人と同棲なし得ぬことを知って、絶望の極、出家遁世する。

厳密に言えば、一〜四の条件を満たしている作品が、しのびね型の主題を持つ物語と定義されるべきであろう。しかしながら、散逸物語の断片的な資料からは、その構想の細部までも窺い知ることは困難である。そこで本稿では、

相思の男女の仲が、何らかの事情により破綻する。

男君から離れた女君は、帝龍を受ける身となる。

という構想を持っていたと推定できる物語を『風葉和歌集』

から抽出し、検討する対象とした。この基準に従って抽出すると、しのびね型の物語である可能性を持つ作品は次表の八作品<sup>注</sup>である。

物語名	女君	男君
1 つつせみ知らぬ	中宮	宰相中将
2 親子の中	中宮	内大臣
3 末葉の露	女院	右大臣
4 玉藻に遊ぶ	尚侍 東宮の母女御	関白 不明
5 千々に砕くる	きさい	左大臣
6 みづから悔ゆる	尚侍	左大将
7 目も合はぬ	皇后宮	左大将
8 吉野山	中宮	中将

なお、『つつせみ知らぬ』『親子の中』『玉藻に遊ぶ』については、かつて拙稿『風葉和歌集』所収散逸物語に見える『后妃の密通』(『文献探究』43号、二〇〇五年三月)において、しのびね型の可能性もある物語として取り上げており、本稿と重複する部分があることをお断りしておく。

三

1 『うつせみ知らぬ』 四首(五首)

『風葉和歌集』 所収歌数。(一)内は詞書中の記載を含めた数。

(A) 巻第四秋上241

野分の朝、藤袴に付けて女に遣はしける

うつせみ知らぬの宰相中将

藤袴しをるる色によそへても物思ふ袖の露やまさらん

(B) 巻第七釈教486

枯れ果てむ後を恨みよ埋れ木も花咲く春のありとこそ

聞け

これは、うつせみ知らぬの内大臣の、中宮行方知らぬさまになり給ひ、頭中将も世にかしこまることなど侍りけるころ、清水にこもりて、枯れたらん植木もと経読み侍りけるを聞きて、「花咲かんことを祈りし埋れ木はさてだに朽ちて根さへ枯れめや」と思ひて、いささかまどろみ侍りけるに、この寺の師の大徳とおぼしきが申し侍りけるとなん。

(C) 巻第十八雑三1398

世を逃れ侍らんとて、中宮に便りあらば見せたてま

つれとて、書き置き侍りける

うつせみ知らぬの宰相中将

君をのみつらきながらもほだしにて今ぞふみみる岩のか

けみち

(D) 巻第十八雑三1399

これを御覧じて

中宮

今はとて入りけむ道の懸路にも心一つや後れざるらん

Cの詞書には、宰相中将が中宮への文を「便りあらば」見せて欲しいと託したとあるので、二人は容易く連絡をとることのできる近親者ではないようだ。宰相中将の詠歌とそれを目にした中宮の詠歌Dから、両者が互いに心を通わせ合っていたことが窺え、宰相中将を追いかけて行きたいと言う中宮の姿は、宮中で対面した中将に「ただいづくまでも、もろともにも具しておはせよ」(中世王朝物語全集82頁)と懇願する、『しのびね』の女君を想起させる。

Aの詞書にある「女」が中宮であるならば、この時点では宰相中将が中宮に手紙を渡す際に何の憚りもなかったはずだが、少なくとも宰相中将が出家遁世を決意したこの時点において、彼と中宮とは容易く手紙の遣り取りができる間柄ではなくなっていたようなので、AからCまでの期間に、二人は

離れ、中宮の入内が決まったのだろう。

小木喬氏はBの左注から、中宮と頭中将は内大臣の子であると想定され、また、中宮の地位にある人物が行方不明になるとは考え難いので、彼女の失踪は入内以前の出来事であろうと指摘された(『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』笠間書院、一九七三年)。

中宮が内大臣の娘であるとすれば、それ程の貴顕の姫君でありながら失踪してしまう彼女は、正妻腹の娘ではない可能性が高いだろう。もしくは早くに母を亡くし、後妻を迎えた内大臣と疎遠になっていたのかもしれない。父と同居しておらず、母方の後見も不十分という境遇にあり、それゆえ、宰相中将が密かに通う隙も生じ、更には、中宮自身の失踪という事態に陥ったものか。

中世王朝物語には積極的に恋を求める帝が登場しており、『石清水物語』では、入内を取り止めて中務宮と結婚した木幡の姫君を諦めきれない帝が彼女を宮中に拉致し、『むぐら』の女君は、東宮の御息所である妹に会うために参内した際、帝に見初められて取り籠められる。だが、何れも女性の親族にその所在を長期間伏せることはなく、内大臣が娘の所在を知らされていない『うつせみ知らぬ』の場合、中宮の失踪に帝は関与していないと思われる。

現存する資料のみでは、内大臣の姫君がどのような事情で失踪し、後にどのような経緯で入内することになったのか、詳細は不明であり、中宮が入内後に宰相中将と密通した、所謂「帝の御妻をあやまつ物語」である可能性も否定できない。

ともかく、この物語がしのびね型に分類されるものだとすれば、父と離れて暮らす内大臣の姫君に宰相中将が密かに通うようになったが、何らかの事情で姫君は失踪。娘の行方を求め、また、謹慎中の息子の身も案じた内大臣は清水寺に参籠して、子供たちの将来は安泰だという夢告を受ける。その後、父のもとへ戻った姫君は入内し、彼女との今生の逢瀬を諦めた宰相中将は、出家遁世する。中宮は、彼を偲びつつ、帝寵を得て後の位にのぼる、という構想を持っていたと考えられる。

## 2 『親子の中』 十四首

(A) 卷第一春上46

中宮、里におはしましける比、奉らせ給ひける

親子の中の帝の御歌

ながむとも同じ心にたれか見む思ひくまなき春の夜の月

(B) 卷第一春上47

御返し

ながむれど心は晴れず春の夜のつきせすものを思ふ身なれば

(C) 卷第四秋上271

女のもとにまかりて、独り明かしてよめる

親子の中の内大臣

知るらめや片敷く袖をしぼりつつ明かしわづらふ秋の夜

な夜な

(D) 卷第六冬394

恨むることありて逢ひ侍らざりける女の、独り明か

して、池の水鳥の番離れぬをうらやましく見て

親子の中の内大臣

水の上に氷閉ぢたるをしだにも番離れて明かすものは

(E) 卷第六冬409

女のもとにたびたびまかりて、独り明かしてよみ侍

りける

親子の中の内大臣

独り寝の夜を重ねたる寂しさに床さへさゆる片敷きの袖

(F) 卷第十賀701

今上一の宮生まれさせ給へりける産養に、ちこの御

衣調じてきこえ侍りける 親子の中の東宮の女御

龜山の岩根の小松生ひ添ひてこれこそ千代の初めなりけ

れ

(G) 卷第十三恋三960

みかどの御返事にたてまつらせ給ひける 親子の中

の中宮

ひたすらに消えもはてなで長らふる身をばつれなく人や

見るらん

(H) 卷第十四恋四980

内大臣心変りたるさまに見え侍りけるころよませ給

ける

親子の中の中宮

変りゆく人のつらさも分かれぬにかに知りてか袖のぬ

るらむ

(I) 卷第十四恋四1030

心ならず隔たりて、逢ひがたくなりける女に、病

にわづらひけるころ遣はしける

親子の中の内大臣

さりとと思ふばかりにかけとめし命も今は限りなり

けり

(J) 卷第十七雜二1325

世を離れむと思ひ立ちけるころ、箏を掻き鳴らして

親子の中の中宮の母

今はとて掻きなす箏の果ての緒に心細くもなりまさる

かな



Hの詞書によつて中宮と内大臣とが相思の仲であつたことは判明しているが、二人の恋が中宮の入内以前なのか以後なのかは不明である。

内大臣には女性と会えないことを嘆く詠歌C・D・E・Iがあり、その女性と中宮が同一人物であるならば、内大臣が心変わりしたように見えたことが原因で二人の仲は破局し、その後の中宮が入内したと考えられる。

三角洋一氏は、『親子の中』の粗筋を現存『しのびね』に基づいて詳細に組み立てられており（『おやこの中』と二条太皇太后宮式部）『物語の変貌』若草書房、一九九六年所収。初出は、紫式部学会編『古代文学論叢』第7輯 武蔵野書院、一九七九年）、この物語が『しのびね型』の構想を持つものだとすれば、『風葉和歌集』所載歌から、次のような内容を持つていたと想定できる。

内大臣が通つていた女君は、中宮になれる程であるから、身分は高いはずだが、父を亡くしていたのだらう。母と暮らす女君のもとへ内大臣が通うようになったが、父親の後ろ盾がない女性との仲を両親に反対されて、女君への訪れが途絶えてしまった。もしくは、他の相手との結婚を強いられ、内大臣の正妻となつた女性側の策略などにより、女君と「心ならず隔た」つてしまったのであつて、内大臣が女君と疎遠に

なつたのは、彼女が思い込んだような「心変わり」ゆえではなかつた。

内大臣の訪れが途絶えた理由を知らず、不実を恨んだ女君は、再び訪ねて来た内大臣と会うことを拒んだが、行く先を告げずに家を出たよつて、それを内大臣が嘆いたのがC・D・Eであろう。女性が所在不明になつた事情は異なるが、『むぐら』の大將は、帝によつて宮中に取り籠められた女君の行方を突き止められず、傷心のまま女君の家に赴いて独り寝しており、これに類似の場面であつたか。

女君の失踪について三角氏は、女君の母が内大臣の途絶えによる心労のあまり病床について出家し（J）、娘の将来を案じながら死去したため、女君は母を失望させた内大臣を恨み、母の喪が明けた後、住まいを引き払つて東宮女御のもとに身を寄せたのだと推測されている（同氏著前掲書）。この東宮女御こそ、女君と帝（今上帝）との出会いの契機となつた人物なのかもしれない。東宮の御息所となつてゐる妹に会うため参内し、そこで帝に見初められた『むぐら』の女君と同様に、『親子の中』の女君も東宮女御のもとで帝寵を受ける身となつたのかもしれない。

「あなたは、私と同じ心でこの月を眺めてはくれない」と女君に語りかける帝（A）は、女君と内大臣との過去の経緯

も、女君が内大臣を思い続けていることも承知していたらしく、「月を眺めても私の心は晴れない」と返す女君（B）の方も、その事実を隠してはいないようだ。

失踪した女君の行方を求めていた内大臣は、女君が帝の寵愛を受けていると知り、『むぐら』の大將、『あきぎり』の宮の大納言のように、内大臣も女君との再会が叶い難いことを嘆き、その心痛がもとで病臥したのか、死期を悟って彼女に辞世の如き歌を寄越す（一）。

そのまま内大臣は死去し、女君の心中を氣遣う帝の慰めに対する返事が生き長らえる我が身を嘆くGであるうか。『いほでしのぶ』でも、かつて内大臣の妾妻であった伏見大君を寵愛する嵯峨帝が、内大臣の死に際して大君を氣遣い弔意を示しており、それに対して自分に薄情だった内大臣よりも深い情愛を寄せてくれる帝の方を慕わしく思う大君は、「今となっては別れた内大臣よりも、帝の方を大事に思っている」と心じるのだが、嵯峨帝に心を移した大君とは異なり、『親子の中』の女君は、心変わりしたように見えた内大臣を恨みながらも、依然として彼を恋慕していたようである。

女君が中宮となったのが、内大臣の生前か死後かを判別できる資料はないが、Fの詞書にある今上帝の一の宮を産出したことで、立后する運びになったと考えられる。東宮女御の

言祝通りに、中宮となった女君は将来の国母としての栄華を約束されたのだろうが、それでも『しのびね』の女君と同じく、内大臣との儂い縁を嘆き続けていたのであるうか。

3 『末葉の露』九首（十首）

（A） 卷第六冬 416

女院行方知らで嘆きけるころ、木枯し荒くしぐれうちして、また吹き返し、あられの音のおどるおどろしきを聞きて  
末葉の露の右大臣

恋ひわぶる冬の夜すがら寝覚めして時雨が上のあられをぞ聞く

（A） 『物語』二百番歌合 後百番歌合 九十六番 392

右 宰相中将と聞こえし時、久しく例ならざりし紛れに、女君のゆくへ尋ね失ひて  
右大臣

恋ひ渡る冬の夜な夜な寝覚めして時雨が上の霰をぞ聞く  
（B） 『無名草子』

物の怪のしわざなれども、宰相中将の心、ただ変りに変わるこそ、いとあさましく、あはれなれ。

（新編日本古典文学全集251頁）

A の詞書により、右大臣が宰相中将であった当時、通つ

ていた女君のもとへ足を運ばなかった時期があり、その間に姿を隠した女君はやがて入内して後に女院となる、というしのびね型の構想を持つ物語だと判る。また、Bから、右大臣が女君を訪れなかったのは物の怪に憑かれて心神喪失のような状態になったことが原因であると判明しており、正妻側の祈祷によって男君が女君のことを忘れさせられる『あきぎり』のような妨害者の存在も推測される。

ただし、『末葉の露』は単なるしのびね型の物語では終わらなかつたようだ。物語最末に「皇后宮」となる人物の誕生に際して、将来の後がねと期待を込めて祝福する女院に、関白の母がこの女児の後見を依頼するような歌を返している(C)ことから、この時点ですでに女院は後宮においてしるべき地位を得ていた、つまり、所生の皇子が東宮位には就いていたはずであり、女院の入内以降少なくとも二十年に亘って物語は続いたと考えられる。

(C) 巻第十賀704

皇后宮生まれ給へりける七夜に、女院より、ちこの衣に結び付けて、「千代経べき鶴の毛衣いつしかと雲居に慣れむほどを待ちみむ」と侍りける御返し

末葉の露の関白の母

生ひ立ちて雲居に慣れん鶴の子の千代の契りも君のみぞ見む

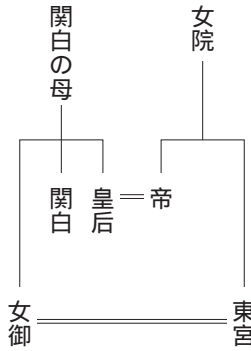
女院と関白の母との間柄がいかなるものであるのかは不明だが、関白の母、もしくは彼女の夫は女院の近親者で、皇后宮は関白の母の娘、あるいは孫だと考えられる(後に掲げる系図には、皇后宮を関白の母の「娘」とする場合のみを示した)。おそらく、皇后宮は長じて女院所生の今上帝の後宮に入内し、女院の後ろ盾もあつて皇后となつたのだろう。改作本『しのびね』の女君を始めとして、王朝物語に登場するしのびね型の女君は能動的に政局に関与する姿を見せないのだが、Cによって、皇后の冊立に関わり、宮廷に対する影響力を行使したらしい女院の姿を窺い知ることができる。成人して後宮入りしたこの皇后宮が、東宮女御に送つた歌(D)も『風葉和歌集』には収録されている。

(D) 巻第一春上24

春宮の女御、宣耀殿に住み侍りけるに遣はさせ給ひける  
末葉の露の皇后宮  
九重の同じ御垣の内ながら霞み込めたる鶯の声

皇后宮と女御とは近しい関係にあったらしく、二人が姉妹であるならば、年齢的な釣り合いから推測するに、皇后宮の配偶者である帝と東宮も兄弟であり、東宮の母も、今上帝の后妃の決定に影響力を持っていたと思われる女院なのかもしれない【系図一】。

【系図】



また、女御が皇后宮の姪（この場合、女御は関白の娘と考えられる）であるならば、東宮は皇后宮の子で女院の孫にあたりと考えられ【系図一】、とすれば、『末葉の露』は女院の入内以降四十年近く続き、三代に亘る物語であったと推定できる。

【系図】



ところで、女院とどのような間柄なのかは不明だが、『末葉の露』という題号の由来となった歌の詠者・右大将（以下「大将」）なる人物がいる。

(E) 『物語二百番歌合』 後百番歌合 九十七番394

右病、限りになりて

右大将

いつの日か雁の羽風に誘はれて末葉の露の消えは果つべき

『玉葉』に「今日書先日自院所下賜給<sup>末葉露</sup>天詞」（治承三年八月三十日）という記述もあることから、大将が主要な登場人物であったことは間違いないようだが、どのような役割を担っていたのかを具体的に示す資料は見出せない。この歌を詠じた後、大将は死去したようで、『無名草子』には大将の喪に服する随身の様子に言及した箇所がある。

(F) また、大将の失せのほど、正月に、隨身が服いと黒く  
て参りたるところなどこそ、あさましく、あはれなれ。

(新編日本古典文学全集 251～252頁)

『風葉和歌集』にも「大将」を追悼する二首の歌が採録され  
ており、Eの詠者「右大将」と次の資料Gに見える「左大将」  
は、官職名こそ一致していないが、同一人物だとする説が一  
般的である(下田仁子「すゑはのつゆ」、『女子大國文 京都  
女子大学』第5号、一九五七年三月)、長谷川「常磐井」和  
子「『末葉の露』復原試論」、『学習院大学 国語国文学会誌』  
第2号、一九五八年)、小木喬前掲書、神野藤昭夫前掲書)。

(G) 卷第九哀傷 645

左大将身まかりにけるころ、時雨のする日、女院に  
聞こえ給ひける 末葉の露の一品の宮

嘆きつつながむる空もかき曇りしぐるる袖や涙なるらむ

(H) 卷第九哀傷 646

御返し

しぐるなる空だにも見ずせきかぬる涙の川に身は流れ  
つつ

この大将については、『無名草子』で言及される「源中将」  
(I)とも同一人物であるとし、女君を捨てたかに見える宰  
相中将(右大臣)に非友好的な態度を示していることから、  
小木氏は彼を女君の後見役的な立場にあった人物と想定され  
ている(同氏著前掲書)。

(I) 源中将こそ、そなたざまの人々と言ひつべくて、心  
にくけれ。宰相中将の、病よくなりて参りたるに、行き  
逢ひて、うち見て、ただ腰礼ばかりうちして行き過ぎた  
るなどこそ、いみじく妬けれ。

(新編日本古典文学全集 251頁)

また、同じく大将と源中将を同一人物と見る常磐井和子氏は、  
女君・右大臣・大将の三角關係を想定し、大将の死を悼むF  
の一品の宮は、実は女君が入内前に身籠もっていた大将との  
間の子ではないかと指摘されている(同氏著前掲論文)。そ  
れならば女院は、内大臣・関白との仲に見切りをつけて嵯峨  
帝の尚侍となり、関白を父とする女児を皇女と偽った「いは  
でしのぶ」の伏見大君と同じ道を選んだのか。

あるいは、大将は女院の子で、『しのびね(改作本)』む  
くら『あきぎり』の女君たちと同様、女院も右大臣の子を

出産した後に入内したのかもしれない。それならば、『末葉の露』は、右大臣との悲恋に端を発する女院の栄華というしのびね型の内容を前半部とし、続く後半部は、幼くして生母と引き離された大将を中心人物として彼の悲劇的な死を描く物語であったとも考えられる。

以上、しのびね型の構想と関わりを持つと思われる登場人物たちを中心に取り上げて検討してきたが、この他にも、重要な役回りを演じた可能性のある『東宮の宣旨』姉妹などの存在が確認されており、『末葉の露』は宮中における多種多様な人間模様を描いた作品なのかもしれない。現存『しのびね』の内容と比較する限りでは、紆余曲折を経て女君が后妃に成り昇るといふしのびね型の枠にとどまらず、少なくとも女院・右大臣の次世代にまで連なる物語を展開していたのである。

#### 4 『玉藻に遊ぶ』 十四首

天喜三年（一〇五五年）五月三日の「六条齋院祿子内親王家物語歌合」に『玉藻に遊ぶ権大納言』の名で提出された物語である。

この『玉藻に遊ぶ』はしのびね型の要素を二つ含み、恋仲だった男性と離れて宮中に出仕する尚侍・東宮の母女御

という二人の女性が登場する。前者は物語最末まで尚侍であった古本『しのびね』を、後者は国母となった改作本『しのびね』を、それぞれ想起させる人物であり、以下、この二人を取り巻く物語内容について個々に検証していく。

尚侍

(A) 卷第十二恋二936

内侍のかみ見そめて侍りけるあしたに遣はしける

玉藻に遊ぶ関白

越えて後静心なき逢坂をなかなか関のこなたなりせば

(B) 卷第十四恋四1021

尚侍、心にもあらず内に参りけるころ、「頼みこし

ことぞ悲しき呉竹の」と書きて侍りけるを見て

玉藻に遊ぶ関白

呉竹のよよに絶えじと思ひしをいかでむなしき仲となり

けん

(C) 卷第六冬429

内侍のかみさま変へて侍りける後、雪の朝に遣はさ

せ給ひける

玉藻に遊ぶの朱雀院御歌

あはれとは思ひおこせよ片敷きて身もさえわたる雪の夜

な夜な

(D) 『無名草子』

蓬の宮こそいとあはれなる人。後に尚侍になりて、もとの大臣に出だしたてられたる、ひろめき出でたるほどこそいと憎けれ。  
(新編日本古典文学全集240頁)

Dによると、尚侍は当初「蓬の宮」と呼ばれており、「もとの大臣」の計らいで出仕している。「もとの大臣」が誰なのか、「ひろめき出づ」は何を意味するのか、諸説のあるところだが、いずれにせよ、尚侍としての出仕は蓬の宮にとつて不本意であつたことはBの詞書により明らかである。

「蓬の宮」という呼称から松尾聡氏は、彼女が皇統に連なる高貴な出自でありながら、父宮または両親の庇護を失つて、荒廃した宮邸に住んでいたと推定されている(『平安時代物語の研究』東宝書房、一九五五年)。

その宮邸に閑白が通つていたのであるが、どういふ経緯を經たのか、蓬の宮は「もとの大臣」の世話を受けて不本意ながらも尚侍となる。尚侍が参内した頃に詠まれたBは、主のいない宮邸を訪れた閑白が、「頼みこしことぞ悲しき」といふ蓬の宮の手遊びを目にして、彼女との仮初めに終わった縁を嘆いたものであるうか。蓬の宮が詠んだ歌の下の句は不明だが、「閑白を」頼りに思つていたことが悲しい……と

あるので、閑白の不実を詰る内容だつたのかもしれない。実際には閑白が不誠実だつたのではなく、何らかの事情により蓬の宮のもとへ通うことが困難になり、その間に宮の出仕が決定する、というしのびね型の展開も想定できよう。

尚侍が仕えたのは出家した彼女に孤閨の寂しさを訴えるこの詠者朱雀院で、彼女の落飾が院の在位中の出来事か退位後のことなのかは不明だが、おそらく彼女は院の寵愛を振り切つて世を捨てたのであろう。また、その一件に閑白との悲恋が関係していたとすれば、閑白への未練もともに断ち切つたと考えられる。

なお、尚侍との悲恋は主人公である閑白の女性遍歴を彩る一つのエピソードに過ぎなかつたのか、彼は一条院の女一の宮の降嫁を望み、冷泉院の皇后との間に不義の子を儲けていた可能性もある。<sup>注4</sup>

#### 東宮の母女御

(E) 卷第十四恋四1022

内に参らんとし侍りける後の逢ふ瀬をさまさま契りて、「巖に生ふるまつほどは」と申しける人の返し  
に 同い東宮の母女御

契りきと我は忘れず思ふとも巖に生ふるまつ人もあらず

(F) 物語にとりて、主としたる身のありさまは、いとうたてありかし。

また、『巖に生ふるまつ人もあらし』と言へる女御ぞ、さる方にてかからぬ…

(新編日本古典文学全集240頁)

東宮の母となる女御は、入内以前に男性と恋仲になっていた。すでに男性を通わせていたにもかかわらず、女御としての入内が取り決められたのだから、二人は、女御の親、もしくは後見人にも隠れて忍びやかな逢瀬を持っていたのだろう。しかし、相手の態度は女御の目に不誠実と映っていたのか、入内が決まった女御に対して入内後の逢瀬を言葉尽くして誓ったらしいこの男性に、「私が約束を忘れずに貴方を思い続けても、貴方は約束を守ってはくれないでしょう」と応じる女御は、彼の言葉に不信感を抱いていたようだ。男女の仲が何らかの障害によって破綻した後に女君が帝寵を受ける身となるしのびね型とは、やや趣を異にするのかもしいないが、女御には入内以降に相手と忍び逢うつもりはないように、少なくとも入内を契機として二人の関係は絶えたと思われる。

『玉藻に遊ぶ』の登場人物たちに批判的な視線を向ける

『無名草子』が、この女御を好意的に評しており(F)、最終的に東宮を出産して将来の国母という地位を手に入れる女御は、不実な男性を見限って入内した後、昔の恋に心惑わされることなく——別れた恋人を慕って忍び泣くこともなく——、賢明に身を処したのではあるまいか。しのびね型の女君たちの中では、際だって意志的な人生を歩んだのが、この東宮の母女御なのかもしれない。

5 『千々に砕くる』 八首

(A) 卷第七釈教483

恋ひわぶる心は闇に暗すとも雲居の月をよそにながめよ  
これは、千々に砕くる左大臣、もの申しける女のき  
さいに立ち給ひにけるを知らで嘆きけるこの夢に、  
石山よりとて、巻数の札に書き付けたりけるとなん。

(B) 卷第十四恋四1006

いとせちに思ひける女に、ただしばし添ひて侍りけるが、行方知らずなりにければ

千々に砕くる左大臣  
夢とのみ思ひなせども見しままの面影にこそ忘れわぬれ



立后した女性が探し求める女君その人であると気付かないのだから、左大臣は「いとせちに思ひける女」の素性を知らされておらず、彼女は左大臣との仲を隠して入内したと考えられる。

寢覚の上と内大臣のように、物詣や方違えの際にお互いの素性を知らぬまま逢瀬を持った後、女君は自分の名も告げずに行方をくらましてしまったのだろう。女君が姿を消した理由は不明だが、男女の双方が相手の素性を知らない段階でしのびね型にありがちな親族などによる妨害工作が行われるとは考え難く、もともと入内予定であった女君が自分の身元を左大臣に知られないよう細心の注意を払い、仮初めの逢瀬の後に彼から逃れたのであろうか。

この女君は、悲恋の果てに紆余曲折を経て帝寵を得るしのびね型の女君たちとは違うタイプの女性のようであり、従って「千々に砕くる」がしのびね型の要素を含む物語である可能性も低い。しかしながら、その可能性が皆無であると断定するだけの資料も存在しないため、本稿に取り上げることにした。

なお、『風葉和歌集』には左大臣が他の女性と交わした歌も収録されており、彼は「按察の御息所」なる女性と密かに通じていたようである。

(C) 卷第十一恋一 837

忍びたる所にて、情なからぬさまにもてなして出づ  
とて 千々に砕くる左大臣

世の常の別れと人や思ふらむこはたくひなき袖の涙を

(D) 卷第十一恋一 838

返し 按察の御息所

たくひなき袖の涙を懸けてだに見し夜の夢と人に語るな

Cの詞書に「情けなからぬさまにもてなして」とあるので、左大臣は実際には按察の御息所にさほど心惹かれなかったのかもしれない。御息所と忍び違いながらも、左大臣の心を占めていたのは、名乗りもせず消えた女君への未練であったのだろうか。

6 『みづから悔ゆる』 九首

御物本『更級日記』の奥書に、

よはのねざめ、みつのはままつ、みづからくゆる、あさ  
くらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ。

(新日本古典文学大系 432 頁)

とある。菅原孝標女が『みづから悔ゆる』の作者であるという確証はないが、『狭衣物語』にこの物語名が見えていることから、十一世紀には成立していたと考えられる。

しのびね型 の内容を示唆するのは、尚侍と左大将との関係を示す次の二首である。

(A) 卷第十三恋三950

左大将つらきさまに侍りければ、行方も知られ侍らざりけるを、尋ね出でて、立ち返り恨みわび侍りければ

涙のみかかる契りは憂けれどもつらかりしさへ形見とぞ思ふ

(B) 卷第十七雑二1304

左大将の大内山に侍りけるころ、松の末吹く風の音のみ耳とまりて みづからくゆるの尚侍

まだ人目知らぬ山辺の松風はこととぶさへぞ身にはしみける

Aの詞書によると、左大将の態度を薄情と感じた女君は行方をくりますが、彼女を捜し出した彼から恨み言を言われる。それに対して「涙で袖を濡らすばかりのこうした縁は辛いけ

れど、貴方が私に薄情だったことさえも、思い出として大切にします」と心える女君は、この時すでに尚侍として出仕し、帝に寵愛されていたのかもしれない。

尚侍の職にある女性が失踪する可能性は低いので、女君のもとへ左大将が通っていたのは彼女の出仕以前のことだろう。「信するに足りない相手である」と左大臣との関係に見切りをつけ、自らの意志で姿を隠した女君が、如何なる経緯で尚侍の地位を得たのかは不明だが、『玉藻に遊ぶ』の東宮の母女御と同様、彼女も意志的に生きたしのびね型の女君なのかもしれない。

左大将には右大臣女と交わした歌(C・D)もあり、大将の様子を女君にとつて「つらきさまに」見えたのは、右大臣女との結婚を勧める大将の親が女君との関係に反対したからとも考えられる。

(C) 卷第十三恋三937

おろかなるさまに思ふらんとおぼゆる女に、もののみ心細きよし語らひ侍りけるついでに

命だに世に長らふるものならば君に心のほども見えまし

(D) 卷第十三恋三938

返し

長らふる我が身の憂きを思ふよりほかに人は人を恨みやはする

右のおほいまうち君の女

のおもしろきをたまはせたりければ

目も合はぬの後の宮の弁

朝夕の露分けわびし白菊も秋の都の光とや見し

だが、物語最末に「右のおほいまうち君の女」(D)と呼ばれる存在であった彼女が、実際に左大将と結婚したのかどうかは判らない。また、Cの詞書によれば、右大臣女も左大将を不誠実な男性と見ており、尚侍を嘆かせた左大将の「つらきさま」は、親の反対などという外的要因ではなく、彼自身の内的な問題に起因するものであつて、だからこそ、尚侍にも右大臣女にも、愛情を疑われるような態度をとっていたのだらうか。

7 『目も合はぬ』 三首

(A) 卷第十四恋四1011

御心にもあらず右大将のもとにおはしましけるころ、  
思はずことありて 目も合はぬの右大臣の皇后宮  
同じ世にかばかり物を思ふとも知らでや人の忘れゆく  
らむ

(B) 卷第五秋下317

右大臣の女御、きさいに立ち給ひて後、帝、菊の枝

右大臣の娘である皇后宮は、かつて心ならずも右大将のもとに居り、そこで誰かのことを思っていた。Aを詠む皇后宮は、相手が彼女の強い思慕の情にも気付かず、彼女のことを忘れてしまつたのではないかと案じているようだ。

皇后宮・右大将・帝の關係については、右大将は皇后宮を盗み出したのではなく彼女の叔父のような統柄で、Aは皇后宮が後の帝を思う歌であらうという説(小木喬前掲書)、皇后宮が「帝との關係をひき裂かれるように、右大将にとりこめられるということがあつた模様」(『中世王朝物語・御伽草子事典』、勉誠出版、二〇〇二年)とする説がある。

皇后宮が当初から帝に思いを寄せていたのであれば、彼女はしのびね型の女君では有り得ないが、ここでは、しのびね型の要素を含む『石清水物語』と類似の構想を持っていた可能性を提示しておく。

『石清水物語』における しのびね型 の要素の概略は次のようなものである。

伊予介と通じたことよつて入内を取り止められた木幡

の姫君は、老齡の中務宮に嫁せられる。夫を厭う姫君は泣き暮らし、密かに伊予介を思つが、数年後、美貌と評判の姫君を諦めきれない帝の計略によつて宮中に連れ去られ、藤壺女御となつて時めく。当時病床にあつた宮は何も知らぬまま死去。その後、木幡の姫君は第一皇子を出産し、後の地位を約束される。

『目も合はぬ』の皇后宮が木幡の姫君と同じような運命を辿つたとすれば、男君との恋ゆえに入内中止となつた女君が、結局は男君と結ばれることなく、心ならずも右大将と結婚させられた後、帝の意向によつて女御となり、やがて立后したというしのびね型の内容を想定できよう。

## 8 『吉野山』 四首

(A) 巻第五秋下324

吉野山にて、月を御覧して

吉野山の中宮

帰りても忘れじかし秋深き吉野の山にすめる月影

(B) 巻第十六雑一1232

思ひの外なることありて、山の中におはしましける  
に、鹿の鳴くを聞かせ給ひて

吉野山の中宮

我ばかり憂きを思はぬ鹿だにも山響くまで音をこそは  
鳴け

(C) 巻第十七雑二1313

世を背きて吉野に侍りける人の、いま少し深き山に入るよしきこえて侍りける御返り事に

吉野山の中宮

尋ぬらん草の庵に誘はなん置き所なき露の我が身を

(D) 巻第十八雑三1382

世をのがれむと思ひける道にてよめる

吉野山の中將

ひたぶるに思ひ入りぬる山道に先立つものは涙なりけり

題号となっている「吉野山」は、中宮が一時期滞在し、中將が隠棲した地でもあろう。吉野山を主要な舞台とする物語であつたか。

この物語について小木氏は、出家した藤原高光と后妃である彼の姉妹たちとの交わりが描かれた『多武峯少將物語』と関連づけ、中宮と中將は兄妹、Bの「思ひの外なること」は中將の出家入山を意味し、中宮が吉野山に居たのは中將を尋ねてのこと、と想定された(同氏著前掲書)。一方、神野藤氏は、

女の思慕をふりすてて、中將が遁世し、女はやがて中宮

となる筋立てが推定される。…悲恋遁世と女の栄華というテーマは『しのびね型』に通つものである。

(同氏著前掲書)

と、『しのびね型』の内容を想定されている。

『しのびね型』の物語だとすれば、中宮が吉野山に赴いたのは中将と離別して身を隠すためかもしれない。あるいは、『京に戻つても吉野山の月を忘れることはあるまい』(A)と述懐する中宮は、吉野山に心惹かれる誰かを残して帰京したとも考えられるので、隠棲した中将を尋ね、自分も世を捨て彼とともに過ごしたいと訴えたのだろうか。

世を捨てる決意をした男君に「一緒に連れて行つて欲しい」と女君が取り纏る現存『しのびね』のような場面が繰り広げられたのかもしれないが、すでに宮中で帝の寵愛を受けている女性が出家したかつての恋人を追いかけて都を離れたとは考え難く、『吉野山』の中宮が自ら吉野まで足を運んだのは、入内以前のことであろう。とすれば、中将が出家するに至つた理由は、女君が手の届かない存在となつてしまったことを嘆いて遁世する『しのびね型』の男君たちとのそれとは違うものだと思われる。

#### 四

以上の例を整理すると、『しのびね型』を主題としていた可能性があるのは、『うつせみ知らぬ』『親子の中』『目も合わぬ』『吉野山』、『しのびね型』の要素を含むのは、『末葉の露』『玉藻に遊ぶ』、その要素を含んでいた可能性が多少なりともあるのは、『千々に砕くる』『みづから悔ゆる』である。

ところで、この八作品中、悲恋遁世譚に当てはまりそうなのは、宰相中将が出家する『うつせみ知らぬ』、内大臣が死去する『親子の中』の二作のみである。勿論、男君の出家や死に触れた歌が『風葉和歌集』に採録されていないだけなのかもしれない。しかし、『しのびね型』の要素を含む中世王朝物語の例を見ても、女君に去られた『今とりかへばや』の宮の宰相は別の女性を妻に迎え、伏見大君を嵯峨院に奪われた形になる。『いはでしのぶ』の内大臣を死に至らしめたのは、正妻一品の宮との仲を裂かれた絶望であり、女君を失つた『しのびね型』の男君が必ずしもそれによつて出家したり死に追いやられたりする訳ではない。『しのびね型』の物語の関心は、どちらかと言えば、悲恋の果てに出家遁世する男君の絶望よりも、恋の破局を契機とした女君の栄華を追求する

ことに傾斜していたのだろうか。

いずれにせよ、「男女の仲が破綻した後、女君は紆余曲折を経て榮華への階梯を昇る」という「しのびね型」の一つの定型は、『玉藻に遊ぶ』『みづから悔ゆる』の存在から、十一世紀にはできあがっていたことが明らかで、以来南北朝頃の成立とされる現存『しのびね』に至るまでの長きに亘って、王朝物語はこの定型に挑み続け、様々に変奏させて自身の裡に取り込んで行ったのである。

注

注1 三角洋一氏は、より降る時代に成立した可能性を指摘されている。（『物語の変貌』若草書房、一九九六年）

注2 『風葉和歌集』『物語二百番歌合』の引用は、岩波文庫『王朝物語秀歌選 上・下』に拠った。

注3 無論、この方法では「中将」と「内侍のかみ」との関係が不明瞭な古本『しのびね』も対象外となってしまうので、しのびね型の作品は実際にはより多く収録されていた可能性が高い。

注4 関白は、皇后の服喪期間に次の歌を詠んでいる。

冷泉院のおほきさいかくれさせ給ひて、一品の宮の  
黒き衣にやつれ給ひけるを見て、音も聞こえさすべ  
くもなきに、限りありけるこそよみて

玉藻に遊ぶ関白

かきくらし落つる涙の藤衣着る人分ける色ぞ悲しき

（『風葉和歌集』巻第九哀傷669）

一品の宮は皇后の娘であろう。母のために喪服を着た一品の宮の姿を見て、自分も皇后の死を悼み涙にかきくれているのに一品の宮と同じ色の喪服を着ることはできないと悲しむ関白は、その真情を一品の宮に伝えられない。関白の胸中に宿るのが皇后への単なる哀悼であれば、それを一品の宮に伝えられないのは不自然である。また、仮に関白が皇后に恋慕の情を抱いていたとしても、それが一品の宮に弔意を示すことを躊躇わせるほどの要因になるとは考え難い。おそらく関白は、皇后に対する恋情を胸に秘めておくことができず、彼女と密かに通じ、その結果誕生した不義の子が一品の宮だったのではあるまいか。669番歌は、子まで生じた仲の皇后の死を悼み、実の娘である一品の宮と悲しみを分かち合えない嘆きを込めた歌なのだろう。

（みやざき ゆうこ・本学専門研究員）